

帰化する女優・李礼仙

—唐十郎『新・二都物語』論—

林相珉*

(e-mail:y3k76@hanmail.net)

目次

1. はじめに
 2. 帰化とアイデンティティ
 3. 前作から後継作へ
 4. 復活する「辻政信」
 5. 在日と国民健康保険
 6. まとめ
-

1. はじめに

女優の李礼仙（本名は李初子、日本名は星山初子、1987年に李麗仙と改名）は、1960年代後半から始まる小劇場運動の中で「天井桟敷」の寺山修司、「早稲田小劇場」の鈴木忠志、「黒テント」の佐藤信と共にアングラ四天王と呼ばれた唐十郎とタックルを組み、唐十郎が設立した「状況劇場」に参加し、同劇団の看板女優として活躍した在日コリアンである（1967年に唐十郎と結婚、1988年に離婚）。

李礼仙は唐十郎の処女戯曲『24時53分「塔の下」行きは竹早町の駄菓子屋の前で待っている』（1964年4月11日に公演）では星山初子という日本名でデビューしたものの、翌年の『煉夢術』（1965年2月24日に公演）からは李礼仙という朝鮮名を名乗りながら活躍することになる。そのため、李礼仙は在日コリアン文化研究史の中で朝鮮名を名乗った人物として誰よりも高く評価されている。例えば、朴一（大阪市立大学）は、在日コリアンであることをカミングアウトした歌手の錦野旦（民族名は金明植、日本名は錦野

* 韓南大学校、非常勤講師。日本文学／在日文学・文化研究

明)が紅白歌合戦に出場していた1970年代の初め、紅白歌合戦の常連組には、錦野旦、都はるみなどの在日コリアンの歌手が出場者の四分の一近くを占めていたと述べながら、歌手以外にも芸能界で俳優やさまざまな分野でタレントとして活躍している在日コリアンを次のようにリストアップしている。

歌手・俳優・タレントの分野でも李麗仙、岩城滉一、松田優作、松坂慶子、南果歩、安田成美、島村佳江、大鶴義丹、宮下順子、伊原剛志、井川遙、白竜、姜暢雄、趙珉和、中村ゆり、ソニン、安蘭けい、アンミカ(安美佳)など著名な俳優・タレントが少なくない。ただここに挙げた人たちは在日芸能人の氷山の一角である。実は、出自を隠して活躍をしている歌手・俳優・タレントの方が多い¹⁾。

李礼仙(本稿では「李麗仙」と改名する前の作品を論じるため、「李礼仙」と表記する)は「出自を隠して活躍している歌手・俳優・タレントの方が多い」日本社会の表舞台で稀にも朝鮮名を名乗りながら活躍する「氷山の一角」を代表する女優として名前が挙げられる人物なのである²⁾。しかし、李礼仙本人は「わたし、日本でもわりと昔からアクのつよいほうで、街を歩いていても違和感があって、ふり向かれたりして、じゃ韓国にいったら同じ朝鮮人だから違和感がないかと思うと、やっぱり違和感があったりして、同じ違和感があるなら、生まれ育った日本がいいわなんて思ったりしているけれども。でもいいじゃないかな、そういう人間がいても」³⁾と語っているように、日本生まれで朝鮮語を話せない李礼仙は「韓国」だけではなく「日本」にも「違和感」を感じていた存在である。だから、韓国と日本に引き裂かれた李礼仙を単に朝鮮風の名前から帰納法的に民族的アイデンティティを備えた民族的女優として評価することは、一旦、保留すべきなのである。大事なものは朝鮮風の名前から民族的な誇りを語るのではなく、俳優としての李礼仙が置かれている特定の歴史的文脈に注目し、日本人との交渉の中で構築される様々な問題を具体的に描き出すことに他ならないだろう。

本稿では、唐十郎が1972年に李礼仙の出自を強く意識しながら李礼仙本人に向けて書いた『二都物語』(「文芸」6月)を前作として捉え、それから10年後に書かれた後継作としての『新・二都物語』(新評社、1982年5月)を日本が国際人権規約(1979

1) 朴一『僕たちのヒーローはみんな在日だった』(講談社、2011年5月、54頁)

2) 李礼仙は日本の演劇界で活躍している在日コリアン俳優からも、「在日の俳優たちが日本の演劇界で韓国名を公然と名乗るようになったのは、李麗仙さんの存在が大きいと思う。ぼくもはじめは俳優として日本名を使っていたが、李さんがいる状況劇場に入って、実力があれば本名を名乗っても大丈夫だということが分かり、本名を名乗れる心地よさを実感した。李さんがいて、唐さんがそれをバックアップした状況劇場は、演劇界における在日パワーをくみあげる役割を果たした訳です」と劇団・新宿梁山泊の座長である金盾進(1987年に結成。俳優名は金守珍)が語るように、朝鮮名を名乗る李礼仙の存在が在日コリアン社会に大きな影響を与えたことは確かなことである。(扇田昭彦『舞台を語る』集英社新書、2002年8月、140頁)

3) 編集部「李礼仙インタビュー」(「別冊新評」1974年10月、81頁)

年)と難民条約(1982年)に加盟した1980年前後の在日コリアンをめぐる様々な社会保障の文脈から読み解くことを目的とする。また、李礼仙は1975年に日本に帰化しており、それに伴うアイデンティティの位相をも合わせて考察する。

2. 帰化とアイデンティティ

李礼仙は1975年に韓国籍から日本籍へと国籍を変更している。李礼仙本人はみのもんととの対談の中でその帰化の理由について次のように語る。

みの 帰化したのは、自分の意思で？

李 そうです。

みの 日本の国籍を取って日本人になったほうが、仕事するうえで、生活するうえで、便利なんですか？

李 私の場合は、こういう仕事だったから、そういう意味のことは、基本的には八割方ないんですね。ただ、何かあったときに外人登録証を持っていきやいけない、それからパスポート取るとき、人の何倍も時間がかかるのね。何かあると、罰金だのって。帰化した一番大きな理由というのは、何となくそのときの情勢がちょっと怖いなど。それと私自身、もう日本で骨を埋めるだろうという気持ちもありました⁴⁾。

李礼仙は、帰化の理由は仕事の面からは「八割方なく、外国人登録証の常時持参とパスポート発給の煩わしさであると語りつつ、しかしながら、一番大きな理由は「何となくそのときの情勢がちょっと怖い」と告白する。勿論、みのもんととの対談を読むかぎり、「そのときの情勢」が具体的に何を指しているかは少し分かりづらい。しかも、この後すぐ「私自身、もう日本で骨を埋めるだろうという気持ちもありました」という言葉が続いたため、「そのときの情勢」は具体的に提示されないまますっぱかされている気もする。しかし、次の文章を読めば、上記の対談とはやや少しニュアンスが違ってくることが分かる。

1967年、唐十郎と結婚したが、帰化せず本名はあくまで李初子だった。だが、七〇年代に入って、金大中事件や徐君兄弟の事件などで、スパイ問題が表面化してきた。韓国在住の詩人、金芝河などと交流のあった私は、少しだけだが神経質になっていた。稽古場にと借りていたマンションのオーナーがスパイ容疑で逮捕されたり(これは政治的なことには関係なく、まったくの偶然)、バングラデシュ公演の際、旅行社の人が大使館にビザ

4) みのもんと・李礼仙「おもいっきり対談」(「サンデー毎日」1991年2月3日、149頁)

の申請に行ったところ、ブラックリストに私が載っていると教えてくれたりした。子供（俳優で作家の大鶴義丹）が小学校に入学するということもあって、日本国籍を入手したほうがいくらかでも安全ではないかと思った。当時の私は本気でワラをも掴む思いで帰化することにした。（中略）外国籍だと不便なことがいくつかあったからだ。たとえば、何かあったときに外人登録証を持っていかなければならない。パスポートをとるとき、人の何倍も時間がかかる……5）。

上記の文章で注目したいことは、外国人登録証の常時持参とパスポート発給の煩わしさなどの帰化理由が後半部に来ており、「ワラをも掴む思いで帰化する」心情が大半を占めながら語られている点である。李礼仙が告白する「ワラをも掴む思い」とは、金大中事件や徐君兄弟の事件などのいわゆるスパイ事件が相次いで勃発していた1970年代当時、李礼仙は韓国の抵抗詩人である金芝河との交流があったことから大使館に自分の名前が「ブラックリスト」として載っていることが分かり、本人のことだけではなく、息子のことも心配になり帰化を決心したと語る。つまり、李礼仙の帰化は日本の抑圧的で差別的な社会構造によるものばかりではなく、母国である韓国からも監視と排除の視線を内面化した結果であり、言い換えれば、だからこそ李礼仙の帰化は日韓両国が生み出したものだということになる。

もちろん、帰化によって李礼仙が母国である韓国を完全に否定するかと言えば、そうでもない。帰化後も李礼仙は「帰化したってアタシが韓国人だという事実は消えないし、日本人になったという感覚もない。韓国へ行っても言葉が通じない異邦人です。骨を埋めるのは日本」6)と語っているように、帰化することによってどちらかの国の帰属感を持つのではなく、韓国と日本という硬直した二項対立の枠組みを軽やかに超え、〈境界〉に自分の立ち位置を定めるのである。そして、こうした李礼仙の帰化を夫であり状況劇場の団長でもある唐十郎は、帰化申請のために法務局の「国籍係り」に同行した時のことを小説風のタッチで次のように書いている。

帰化という字をよくよくながめっていると、背中に羽が生えてくる様な気分になる。（中略）
「帰化」の「帰」は帰巢本能の「帰」である。果して、渡鳥の帰化点は南なのか北なのか分らぬが、この南北のひっきりなしの移行の中で、旅は見えざる空間にキリもみ状態で突入しているのかもしれない。さて、それがどこなのかだ。南から北も紙に描けば、コンパスをぶん回した上と下の方角である。しかし、この世にはそんな紙はない。確かと思っている臭覚で南と北を移行しながら、その移行範囲がゆるやかにずれてゆくこともあるし、南という極と北という極を飛びかきながら突然北でも南でも、東でも西でもない、今まで書かれたこ

5) 李麗仙『五つの名前』（集英社、1999年3月、19～20頁）

6) 李礼仙「汚れ役に品性を加えてゆく」（「クロワッサン」1979年7月10日、39頁）

とのない方向に向っておさらばしてしまうこともあるだろう。「帰化」の化は化けることだ。あるいはいくつかのトランスの中の一つに辿り着いた電子の状態。人がそれを行えば、棲息の化粧ということになるかもしれない。それは相対的な移行点にしかすぎない。絶対の帰化は東西南北ではない。羊水の中である。だが、今さらどうやってそんなところに忍び込めようか⁷⁾。

上記の唐十郎の文章は1974年のものであり、李礼仙が帰化したのは1975年のことであるから、ちょうど帰化する一年前に書かれた文章である。唐十郎と李礼仙は状況劇場の団長と女優の関係である以前に夫婦でもあるため、当然、李礼仙の帰化についてはそれなりの話し合いがなされたことは間違いないだろう。だから、上記の唐十郎の文章は李礼仙の帰化に対するアイデンティティの位相を考える上でとても参考になる。

唐十郎はまず、帰化の「帰」の字を「帰巢本能「帰」」と捉える。しかし、「南という極と北という極を飛びかきながら突然北でも南でも、東でも西でもない、今まで書かれたことのない方向に向っておさらばしてしまうこともある」と言いながら、大事なのは、自分が「確かと思っている臭覚で南と北を移行」するしかないと語る。また、帰化の「化」の字を「化ける」ことと捉え、帰化とは「いくつかのトランスの中の一つに辿り着いた電子の状態」であり、だからこそ「絶対の帰化」はあり得なく、「相対的な移行点」にすぎないと語る。つまり、唐十郎が考える帰化とは絶対的な帰属感を強いるものではなく、「いくつかのトランスの中の一つに辿り着いた電子の状態」のように多様な状態であり、究極的には自分が「確かと思っている臭覚」に頼ってなされるべきものである。当然、帰化する李礼仙の「確かと思っている臭覚」とは、戦後一方的に国籍を剥奪させられ、しかも国籍を基準に外国人登録証の常時持参とパスポート発給にも制限を施した日本の排他的なナショナリズムだけではなく、在日コリアンを政治的な物差しで計り、包摂・排除しようとする韓国のナショナリズムの実体を嗅ぎ取ったからに他ならないだろう。

それでは、次は1972年の前作と1982年の後継作との連続と断絶を浮彫りにし、帰化後に書かれた後継作を中心に李礼仙の帰化がもたらす様々な問題を明らかにしてみる。

3. 前作から後継作へ

1972年の前作と1982年の後継作の連続している点は、主人公の「リーラン」（朝鮮人）が両方の作品に出ていること、そしてもう一つはその「リーラン」はある目的のために朝鮮海峡・玄海灘を渡ってきた人物として設定されていることである。まず、前作でのリー

7) 唐十郎「帰化」（『現代詩手帖』1974年11月、62頁）

ランは戦時中、日本の憲兵に兄を殺されその兄のことが未だに忘れられずにまるで亡霊につかれたように兄を探しに東京に来る。そして、何故か痰壺を抱えており、誰にでも「百円ちょうだい！」とせがむ。

課長 百円なら、おじさんあげるよ。
 リーラン ただは貰わないわ。
 課長 じゃ、百円あげたら、何を始めるんだ。
 リーラン 百円くれたら、勇気を見せたい。
 課長 女に勇気を見せてもらおうと思わんよ。
 リーラン じゃ、もういいわ。（『二都物語』17頁）

リーランの痰壺にはじめて百円を入れてくれるのは日本人の「内田一徹」であり、リーランは百円銀貨を恵んでくれたその内田のために「汚物」がいっぱい溜まっている痰壺に手を突っ込みまざりながら「勇気」を見せてあげる。それから、痰壺から百円銀貨を取り出し回転木馬のボックスに入れた瞬間、物語の時間は植民地時代という過去の時空間へと切り替わる。そして、時間のスイッチが切り替わった時、リーランは痰壺に百円を恵んでくれた内田に向って、「兄さん、あたしよ。美しいあなたの妹よ」と内田の顔に植民地時代に政治に巻き込まれ、日本の憲兵に殺された兄の幻覚を見ることになる。

ここで一つ確認しておきたいことは、唐十郎の演劇にみられる「二重の時間」という仕組みである。扇田昭彦は、唐十郎の演劇には「失われた大いなる過去に回帰するか、あるいは永遠の現在にとどまろうとするユートピア的な無時間と、時間の凍結を拒否して劇的行動に突き進む歴史的な時間の流れ」があることを指摘した後、こうした「二重の時間」による演劇的效果を次のように述べる。

唐十郎の劇のうちに身を置くと、私たちが待ち望むのはまさにこうした驚異と戦慄の瞬間の到来であり、或はものがまぎれもなく或はものでありつづけながら、しかし同時にまったく隔絶した別の何ものかであるという存在の二重性の可視的な顕示である。それはつまり、表層の現実の底にひそむもう一つの現実の急激な浮上であり、世界に対する固定化した見方に驚異にあふれた多元的でダイナミックな視点を導入するものだ。唐十郎的世界とは、このように、人間と現実が驚異につらぬかれた表層性とダイナミックな変化の相のもとに激しく情熱的に渦を巻き、ぶつかりあう活力の世界にほかならない⁸⁾。

扇田昭彦は演劇空間に「二重の時間」を導入することによって得られる効果は、「表層の現実の底にひそむもう一つの現実」を前景化させ、「世界に対する固定化した見方に

8) 扇田昭彦「解題」（『唐十郎全作品集 第一巻』所収、1980年7月、冬樹社、396頁）

驚異にあふれた多元的でダイナミックな視点を導入する」ことであると述べる。

そして、ここで大事なのは李礼仙に対してこの「二重の時間」が導入される時、「表層の現実の底にひそむ」どのような「もう一つの現実」が前景化されるかである。唐十郎の演劇の特徴は、「市民社会の秩序」から「下位にはみ出したもの」を演劇空間において蘇らせ、差別構造を作り出した「近代市民社会ののど元に刃をつきつける」構図をとる。だから、唐十郎の演劇においては「下位にはみ出したもの」、つまり在日コリアンとしての李礼仙という役者の身体は演劇そのものを支える重要な要素となる。唐十郎は同時代における役者の身体なき戯曲中心的新劇を批判しながら、「特権的肉体」について次のように述べる。

文学に特権的時間という言葉があるならば、役者がつくる演劇には特権的肉体という言葉もあるだろう。そして、特権的肉体という劇的なイリュージョンは、即、時代的肉体の影法師をかい間見せる筈だ。劇的な想像力は、このように肉体を通しての現前化という回路をもたなければ、可視的に形像されることはない。だからこそ、観る者はそこに形成される形像に、あえて参加するという行為をもってわが身の劇的な想像力を目覚めさせるのだ。もはや偉大な戯曲が必要なのではない。戯曲の中にある作家の劇的な精神が役者を動かすのではない。劇的な役者の精神が戯曲を呼び起こすのだと僕がいえば、そこらにいる劇作家然とした奴らは嫌な顔をするにちがいない⁹⁾。

唐十郎の演劇は戯曲よりはじめに役者の肉体ありだけではなく、「時代的肉体の影法師をかい間見せ」てくれるそれぞれの役者のために戯曲を書くということであった。唐十郎は役者が戯曲を選ぶような環境では、「創造の冒険」は始まらないと主張する。言い換えれば、はじめに戯曲ありという演劇空間では、「知的な喜び」はあっても現実原則そのものを組み替える「創造」はないということである。だからこそ、「一緒に三度の飯を食うのも嫌になるほど、一クセ二クセもある」、「一人一人、情念の特徴をもっている」役者のために戯曲を書くべきだと語る。そして、このようなドラマツルギーのもとで在日コリアンの李礼仙のために書かれたのが1972年の『二都物語』であり、李礼仙が唐十郎のドラマツルギーにおいて「特権的肉体」たり得たのは、在日コリアンという日本社会から「はみ出したもの」であったからである。しかし、李礼仙は在日コリアンでありながらも、日本だけではなく朝鮮にも帰属感をもちない主体である。そう考えれば、「表層の現実の底にひそむ」どのような「もう一つの現実」が前景化されるかだけではなく、どのような主体を蘇らせるかが最も大事になってくる。

そして、前作において「二重の時間」を作動させて唐十郎がリーランの兄として蘇らせ

9) 唐十郎「役者の抬頭」（『腰巻お仙』所収、1969年7月、新潮社、33～34頁）

たのは、韓国では親日派の代名詞として非難されている「李容九」（時間の回転木馬によってリーランは内田一徹を兄である李容九と思いつくようになる）であった。筆者は拙著の中で唐十郎のこうした設定を作品が書かれた同時代に展開していた日韓併合の再評価をめぐる議論と照らし合わせて論じたことがある¹⁰⁾。そこでは日韓併合の推進者であった李容九は、親日派としてではなく日韓「連帯」の「名士」として再評価されている。しかし、唐十郎は李容九を「連帯」の「名士」としてでも親日派としてでもなく、両方の議論それぞれが抑圧的に排除していく、まさしく日韓の政治に翻弄された存在として捉え直している。つまり、唐十郎は引き裂かれた李礼仙の身体を特権的に前景化させることによって、1968年の明治百年を境に日韓併合を正当化しようとする同時代の議論それぞれ自体に異議申し立てをしたのである。

しかし、前作より10年後に書かれた『新・二都物語』では内田一徹も李容九という名前も出てこない。だからと言って、後継作が前作と全く切断されているかと言えば、そうでもない。たとえば、リーランは日本人の「イシハラ」に次のように語る。

リーラン どうして、こんな妹持ったの？

男 ?……どうしてって、僕が持ったんじゃなく、母が産んだんです。

リーラン どここの母。

男 石原家の。

リーラン 石原？

男 れっきとした。

リーラン いつからイシハラ？

男 そりゃ、調べんの難しいでしょ。

リーラン それじゃ、どうして日本名、名乗ってんの？

男 ?

リーラン 別れてから八年です。（『新・二都物語』42～43頁）

前作と後継作の時間差は10年であるから、リーランの語る「別れてから八年」というセリフから二つの作品を前作と後継作として捉えることはやや困難であるような気もする。しかし、前作が単行本として出版されたのは1973年のことであり、後継作が書かれた時点などを合わせて考えれば、ほぼ8年という計算になるだろう。実際、後継作の冒頭では「何度でも生きると言ったリーランは、赤い木馬に乗ってやってくる、なんやら、そんな気のする眠れぬ夜を、あたしは迎えた。何故でしょう。もしかしたら、あれから、ずっと八年、そんな夜ばかりであった事を、あたしがコトンと忘れていたからかもしれません。ということは、眠っていたの

10) 拙稿「物語る「肉体」—李礼仙論」（『戦後在日コリアン表象の反・系譜—〈高度経済成長〉神話と保証なき主体—』所収、2011年3月、花書院、174頁）

は、リーランではなく、あたくしの方だったのかもしれませんが」（11頁）とリーランの復活が紹介されているように、リーランは前作の続きとして後継作に出ているのである。そう考えれば、リーランは日本人の「イシハラ」という人物に兄である「李容九」を重ね合わせて見ているわけであり、そういう文脈において「どうして、日本名、名乗っているの？」というセリフも理解できる。つまり、植民地時代に政治に巻き込まれた兄を救い出すことが主なテーマだった前作とは違って、後継作では兄の「李容九」はいつの間にか「日本名」を名乗っている、いわば日本に帰化した人として設定されているのである（もちろん、後継作の主なテーマは帰化とそれによるアイデンティティの変容を扱っているため、前作を経由することによりはじめて見えてくる「李容九」という固有名詞がなくても、「日本名」を名乗っている朝鮮人という設定だけでも作品それ自体は十分解読できる）。しかし、リーランは「日本名」を名乗っている兄に次のように語る。

リーラン 石原だけじゃ、ごまかし切れないのよ。

男 ？

リーラン いくら、そんな名前で化けてても、あんたはきっと落とされる。あの接岸で、夜の海に突き落とされたように、この都から落とされる。こことあそこを抜けて行くには、二つの身元が必要だ。リーラン、これに早くかじりつかないと、帰りは恐いと教えてくれたのはあんたじゃない。それを、石原ごときでおさまってヌクヌクとしているから、こうして池にもはまんのよ！

男 揉みましようか。（と、さわる）

リーラン （さわらして）でも、石原をめっけて来たのは上出来。誉めてつかわず。あとはもう一人。もう一人を虜にするの。（『新・二都物語』51頁）

リーランの語る「いくら、そんな名前で化けてても、あんたはきっと落とされる」「こことあそこを抜けて行くには、二つの身元が必要だ」というセリフから、李礼仙の帰化申請のために法務局に同行した唐十郎が帰化を「化けること」と書いたことを思い出すだけでも、李礼仙の帰化という出来事が後継作の主なテーマになっていることが分かる。前述したように唐十郎は、帰化とは「いくつかのトランスの中の一つに辿り着いた電子の状態」であり、だからこそ「絶対の帰化」はあり得なく、「相対的な移行点」にすぎないと語っているように、後継作の中でのリーランは日韓のどちらかに「身元」が保証される名前ではなく、「相対的な移行点」としての複数の名前を手に入れようとする。そして、その「相対的な移行点」としてリーランが探し求めているもう一人の「虜」は、他でもなく戦前は陸軍大佐として「作戦の神様」と呼ばれ、戦後は参議院議員となり、在任中の1961年4月に東南アジアの視察のために出国後、ラオスで行方不明となった「辻政信」だったのである。

4. 復活される「辻政信」

それではリーランはどうして自分の「身元」を保証してくれる人として他の誰でもなく「辻政信」という固有名詞を探し求めるのだろうか。何よりも『新・二都物語』が書かれた1982年の当時、辻政信は東南アジアの視察のためにラオスに行ったきり、行方不明となった人物であり、しかも、東京家裁は家族の請求を受けて1968年7月20日付で辻政信の死亡宣告を行っている。リーランは日本名を名乗っている兄のイシハラに「石原と辻をかけ合わせて、ジャスミン家。海に没したかもしれない我がジャスミン家をここにつくればいいんじゃない？」と語るが、何故、これほどまでに辻政信に拘るのだろうか。

それでは、まず、作品における辻政信の造形を見てみると、辻政信は、「ノーパン喫茶・乙女の塔」に雇われており、マスターの「親爺の戦友」だったこともあり、「中国のモルトン高原を、白馬に乗って駆け抜けた時や、あ、これだ、これが「夕陽と拳銃」のモデルだと言われたほどで、そういう歴史上の引け目のために、いやいやここで面倒見なけりゃならなくなってしまった訳」とあるように、辻政信は「歴史上の引け目」から知り合いを頼って潜行している人として描かれている。作品の中では「歴史上の引け目」については具体的には書かれていないものの、しかし、このような設定は辻政信に関する資料を少し紐解いてみれば、それが何かはすぐ分かってくる。たとえば、辻政信を語る時、大体、次のような二つの枠組みにおいて語られることが多い。

辻政信は1902年、石川県生まれ。陸士（36期）、陸大（43期）をトップクラスの成績で卒業したエリート軍人で、戦前はマレー上陸作戦などを指揮した。敗戦をバンコクで迎えた辻は僧姿に姿を変えて当地を脱出、東南アジア、中国に潜伏した。復員後、逃走中の出来事をまとめた「潜行三千里」は50年のベストセラーとなり、一躍、マスコミの寵児となった¹¹⁾。

辻は、一九三九年ノモンハン事件の関東軍参謀として、攻撃一点張りの作戦で日本軍大敗の原因を作り、ガダルカナルの攻防戦の指揮をとって敗北。終戦はタイで迎えたが、その後「潜行」して南京まで行き、中国国民党の国防部のために対ソ連インテリジェンスを行っていたが一九四八年春「潜行」したまま日本に帰ってきた¹²⁾。

ひとつ目の引用文は辻政信を「作戦の神様」として肯定的に捉える時に語られる定番のものであり、ふたつ目の引用文は権限逸脱や単独専行、そして自殺強要や命令偽作など

11) 吉田清久「私が見た「辻政信」」(「読売ウイークリー」2007年4月15日、38頁)

12) 有馬哲夫「CIA文書発掘 失踪辻政信は雲南に抑留された」(「文芸春秋」2010年10月、275頁)

の否定的に捉える時の定番のものである。そして、ふたつ目の引用文に「帰国後二四年一二月「戦犯容疑者に対する調査打ち切り」が発表されてから姿を現わし、衆院議員、参院議員となった」¹³⁾という戦争責任逃れなどの履歴を加えれば、辻政信に関する評価はほぼ出来上がる。

辻政信に関するこうしたふた通りの評価を視野に入れながら『新・二都物語』の中で語られる辻政信を眺めれば、「歴史上の引け目」を感じ「ノーパン喫茶」に潜行している姿は、戦後を僧侶に扮してタイで迎え、日本に帰国してからも極東国際軍事法廷（東京裁判）が1949年9月を限りに新たに戦犯の訴追を行わないと決定するまでの間、姿を現わさずに潜行していたことと重なる。そして、戦時中、中国の「モルトン高原」で辻政信に助けられた経験のある「キャット大使」との会話をみれば、作品における辻政信の造形がもう少しはっきりしてくる。

キャット大使 パンは受け付けませんか。

辻 パンはノーパン。

キャット大使 昔から、あなたはバンバンさえも受け付けなかった。

辻 しかし、これが私の本当の戦いなんじゃないだろうか。かつて、Uボートは海の牙と言われた。君を救った作戦は、月が太陽を喰うのを見定めた。黒龍江から吹く風は、民族の顔という顔を嘗めまわした。それを見てしまった私に、どんなパンが喰えるんだ！

（よろよろ）（新・二都物語』78～79頁）

辻政信の語る「黒龍江」とは中国の最北端を西から東へと流れる大河であり、「君を救った作戦」という言葉から、これは「黒龍江」の中州に浮かぶ島をめぐる領土争いをした1939年の「ノモンハン事件」であることが分かる。当時、満州に駐留していた日本関東軍とソ連の援護を受けたモンゴル軍が一戦を交えたノモンハン事件は、日本では日本政府の承認を得ない関東軍の単独行動だったので、「事件」として扱われている。辻政信はノモンハン事件の時は関東軍参謀として参加しており、攻撃一点張りの作戦で日本軍大敗の原因を作っているため、この事件との関係ではあまり評価がよくない¹⁴⁾。

しかし、作品の中では、「黒龍江から吹く風は、民族の顔という顔を嘗めまわした。それを見てしまった私に、どんなパンが喰えるんだ！」と語っているように、辻政信は作戦の評価

13) 杉浦明平「逆立ちした国民文学」（「朝日ジャーナル」1966年1月9日、36頁）

14) 半藤一利・保阪正康【他】「昭和の陸軍 日本型組織の失敗」（「文芸春秋」2007年6月、126頁）。同座談会の中で半藤一利は「理性的な人たちがいかに功績をあげても中央に迎られない一方で、失敗した人たちが、責任を問われることもなく繰り返し中枢に登用されています。これもまったく不可解。そうした例の代表が服部卓四郎と辻政信のコンビです。二人とも幼年学校の出身で、関東軍の参謀として昭和十四年のノモンハン事件を主導して、ソ連に散々に敗北を喫します。ところががして重大な責任を問われることもなく、やがて中央へ戻ってくる。」と批判している。

それ自体には言及することなく、戦争によって被害を被った「民族」に思いを馳せ反省しているという風に描かれている（こうした描写は当然、辻政信の肯定的な評価を補強することになるだろう）。そういう意味からすれば、辻政信が潜行している喫茶は単なるいやらしい意味での「ノーパン喫茶」ではなく、被害者としての「民族」を思えば「パンさえも受け付けな」い意味においての「ノーパン喫茶」になっているのであろう。

それでは、リーランはどうして辻政信を探し求めるのだろうか。それは「二重の時間」を作動させ、「表層の現実の底にひそむもう一つの現実」を蘇らせる回転木馬のコインボックスに百円銀貨が入れられた瞬間、次のように語られる。

リーラン 長崎県大村の六神丸です。徴用でかき集められた向こうの女から、特に寝顔の美しい女が選り抜かれ、そして店に勤めていました。中には、七日も横になったきりで、ひっくり返すと、辺りには銀バエが群がっていたと聞いてます。何も言わず、裸でそうしているのが、一番気安めになるという客のために、女達はいつもそうして寝そべりながら、客を迎えました。そんな中にこんな女がいましたね。（と、膝をつく）肘が痛くて、寝返り打とうとすると、いいんだよ、起きてても。代りに俺が寝てやろうと、あんたが寝そべろうとするので、とんでもないと、このままうつむくと、あんたは、好きなようにしろと、爪を切っていました。代りに寝ようとしたあんたのその一言のため、母は、帰った後も、その爪拾って持っていたんです！（『新・二都物語』90頁）

「二重の事件」を作動させる回転木馬に百円銀貨を入れた瞬間、リーランは「母」が過ぎたはずの植民地時代という過去の時空間へとタイムスリップすることになる。母は「四十年前」に「徴用でかき集められた」のであり、「寝顔の美しい女が選り抜かれ、そして店に勤めていました」というセリフから、作品の中には具体的に表記されてはいないものの、従軍慰安婦として設定されていることが分かる。しかし、辻政信はそういう母に乱暴をすることもなく、「肘が痛くて、寝返り打とうとすると、いいんだよ、起きてても」と優しく話しかけてくれる。リーランの母は「その一言のため」、辻政信が帰った後もその「爪」を大事に持っていたわけであり、その母の形見を便りにリーランは辻政信を探し求めてきたのである。リーランが他の誰でもなく辻政信に拘るこの部分はとてもロマンチックなタッチで描かれているため、辻政信のどういう所に力点が置かれているのか分かりにくい描写となっている。しかし、次の文章を読めば、どうだろうか。

支那派遣軍にいた時、軍官民の長江一帯における遊興墮落を憤り上海から漢口までのゲイシャ屋を廃業させ、酒や女に悪評ある将官のリストを作って弾劾したため憾みを買ったが、彼は今に至るまで純乎として純なる一穴居士であり、ゲイシャの出る宴会には決して出ない。彼は機密費で宴会をやる人間とウソをつく人間を蛇蝎の如く嫌う。酒は一升でも二

升でも呑むけれども、止めるとなるとピタリと止めるし、タバコは中尉の時戦場で小隊長がタバコを吸うことが兵の気持を安らげるということを知ってから吸い初めたというが、止めるとなるとピタリとやめてしまう歯切れよさは、世の常の人々の決して真似の出来る処ではない¹⁵⁾。

上記の文章は「辻のファンが多いのは単なる逆コースのせいではなく、こういう美点と魅力があるからである」というその一例として紹介される文章である。「軍官民」の「遊興墮落を憤り上海から漢口までのゲイシャ屋を廃業させ」ただけでなく、「酒や女に悪評ある将官のリストを作って弾劾した」というところを読めば、リーランの母に乱暴することもなく、優しく話しかけてくれる作品の中の辻政信の姿は、辻政信のプラス評価として語られる実在の辻政信の姿とオーバーラップしていることが分かる。勿論、このようなプラス評価に力点を置けば置くほど、戦争責任などを追求するマイナス評価は後景化されることは言うまでもない。ともかく、作品の中でリーランは、こうしたプラス評価の辻政信を探し求めてきたのである。

この後、リーランはやっと見つけ出した辻政信に自分の「身元」を保証してもらうために、「辻さん、名前を下さい」とせがむ。そして、リーランに取りつかれた辻政信はついに「こんな辻でよかったら」と自分の名前を差し出すこととなる。しかし、リーランは単なる「名前」だけには満足できず、もっと具体的なものを求める。

リーラン それから、名前は無形だし。
 イシハラ そうね。
 リーラン なんか、形のあるものを預からしてもらえないだろうかってー。
 イシハラ 名前の形のあるもの？
 リーラン 国民健康保険とか！
 イシハラ 国民健康保険下さい。
 (中略)
 辻 (そのリーランの頭上に一つの通帳を投げる)
 リーラン (掴む)
 イシハラ (寄る)
 リーラン (ボロボロのそれを、ひわを伸ばして) 国民健康保険・辻……マサノブ！（新・二都物語』96～97頁）

リーランが自分の「身元」を保証してもらうために手に入れたのは、辻政信の「国民健康保険」であった。しかし、そもそも何故、リーランは国民健康保険を欲しがるのであろうか。もっと単純に考えれば、名前が記入されているものであれば戸籍でもいいだろうし、運転免許書でもよかったのではないだろうか。しかし、同作品が書かれた同時代に目を転じれ

15) 西方望「辻政信に於ける人間の研究」（『人物往来』1953年1月、30頁）

ば、日本に来ている在日コリアンとしてのリーランがなぜ国民健康保険に拘るのかが理解できる。そして、国民健康保険を手に入れたリーランが、何故、たちまち辻政信を裏切ることになるのか、もである。それでは、次は日本が国際人権規約（1979年）と難民条約（1982年）に加盟した1980年前後の在日コリアンをめぐる様々な社会保障を参照しながら、その理由について考えてみる。

5. 在日と国民健康保険

戦後における在日コリアンと社会保障立法との関係を見てみると、1948年に日本では今日の国際人権基準の出発点となる「世界人権宣言」が採択される。これはそれまで一国内問題でしかなかった人権問題を国際化したという点で極めて重要な出来事だった。しかし、これには法的拘束力がなかったため、同宣言をもとに国際経済社会理事会の人権委員会は条約化作業を進めることになる。その結果、1966年には社会権規約、自由権規約、自由権規約第一選択議定書の三つ（国際人権規約）が国連総会で採択されることになる。日本では1979年発効され、それ以降に発生した行為・事実などが条約に拘束されることになる。

社会権規約には、第9条から12条にかけて「社会保障を受ける権利」「家族・母親・児童の保護」「生活水準についての権利」「健康を享受する権利」が国籍によって差別されてはならないと明記されている。しかし、この社会権規約は、締約国の「すみやかな実施」について、一つだけ「留保」を認めている。すなわち、「開発途上にある国は、人権および自国の経済の双方に十分な考慮を払い、この規約において認められる経済的権利をどの程度まで外国人に保障するかを決定することができる」（第2条3項）ということである。日本における国際人権規約の発効が1979年であることを考慮すれば、戦後、高度経済成長を成し遂げ「経済大国」を自認する日本がこの条項を理由に権利を制限することはできないだろう。しかし、日本は長い間、生存権は日本国民にのみ保障されるとして、在日コリアンは公共住宅関連、児童手当関連、国民年金などのさまざまな社会保障から相次いで排除されたのである。たとえば、田中宏は在日コリアンと生活保護法との関係を次のようにまとめている。

現在の生活保護法が制定されたのは一九五〇年で、「国が生活に困窮するすべての国民に対し」行うものとされた。当時、在日コリアンは「平和条約発効までは日本国籍を有する」とされ、その適用を受けることができた。しかし、一九五二年四月二八日を期して日本国籍を喪失した在日コリアンは、生活保護法において「一般国民に対する取扱に準じ

て」「当分の間」適用するが、「不服の申立をすることはできない」とされた（厚生省社会局通達・一九五四年五月八日）。つまり、「権利としての生活保護」は認めないというのである¹⁶⁾。

在日コリアンは1952年のサンフランシスコ条約によって、一方的に国籍を剥奪され「不服の申立をすることもできない」まま、さまざまな社会保障を受けることが出来なくなる。しかし、1979年の国際人権規約と1982年の難民条約によって、たとえば、住宅金融公庫法と公営住宅法などの公共住宅関連の国籍条項が無くなり、在日コリアンにも開放される。そして、1982年の難民条約の発効にともなって国民年金法および児童手当三法（児童扶養手当法、特別児童扶養手当法、児童手当法）の国籍条項が撤廃され、外国人にも国民年金に加入できるようになったのである。

しかし、1938年制定された国民健康保険法の場合は、当初は在日コリアンも加入者だったにもかかわらず、1952年の国籍剥奪にともなって、1958年からは国民健康保険法それ自体には国籍条項はないものの、運用上は在日コリアンを排除する政策を取ってきたのである。在日コリアンが国民健康保険法に加入できるようになるのは、国際人権規約と難民条約よりも遅い1986年になってからのことである。つまり、『新・二都物語』が書かれ上演された1982年には、在日コリアンをめぐる他の社会保障は次々と国籍条項が撤廃され加入できるようになっていくにもかかわらず、国民健康保険法だけは在日コリアンの人権を無視し切り捨てていたのである。

もう一度、作品に戻ってみると、リーランが自分の「身元」を保証してくれる「形のあるもの」として国民健康保険を求める時、それは単純に辻政信の名前が記入されているからだけでなく、それと同時に国際人権規約と難民条約に加盟し、しかも国際条項がないにもかかわらず、在日コリアンの加入を認めない日本の責任問題がリーランを演じる特権の肉体としての李礼仙を経由することによって浮上してくる。そう考えれば、次のリーランの反転はとて示唆に富む。

リーラン　それで、あんたらいくらで買ったの。

長　この辻という名の保険証？

16) 田中宏『在日コリアン権利宣言』2002年4月、岩波ブックレット、38頁）。田中宏によれば、1982年1月1日、難民条約の発効によってもって国年金法の国籍条項が撤廃され、外国人も国民年金に加入できるようになったものの、それでもなお、次の外国人（そのほとんどが在日コリアンと日本籍のコリアン）は、年金制度から切り捨てられたままであると指摘する。「①一九八六年四月一日時点で六〇歳を超えていた外国人は、年金加入が認められず、老齢福祉年金が支給されない。②一九八二年一月一日時点で母子家庭となっていた外国人は、およびその時点で二〇歳を超えていた外国籍障害者には、基礎年金あるいは福祉年金が支給されない。③年金制度発足時の一九五九年一月一日の時点で二〇歳を超えていた障害者は、その日をもって「障害認定日」とされるため、そのあと帰化して日本国籍を取得しても、障害福祉年金が支給されない。」（41頁）

リーラン それ、あんた、ハクがついてんのよ。

リーラン 千五百円かな。

リーラン 安いよ。

(中略)

長 金銭の問題じゃないの。

リーラン 安いんだから、受難は受けろよ。

長 金の事じゃなくてね。あの保険証使うとこういう事される訳があったの。

リーラン 態度が悪かったんじゃない？

長 期限切れなんだよ。

リーラン 期限がなあに？

長 昭和三十何年かで切れてんの。

リーラン そこはうまくやるんだよ。(新・二都物語』158～159頁)

リーランは自分の「身元」を保証してくれる「形のあるもの」として辻政信からもらった国民健康保険をいとも簡単に他人に売ったのである。そして、辻政信はあまりにも衝撃的なリーランの反転ぶり(＝裏切り)に、ただ「尻をつく」ほど呆然としているのみである。この後、リーランは辻政信の場合と同じ方法で騙し取った国民健康保険(「辻」の名のつく期限切れのもの)を売ったことが原因となり一度は死を迎えるものの、時間を操る「赤い木馬に乗って」再び蘇る場面で作品は幕を閉じることになる。

リーランの反転を同時代の在日コリアンをめぐる社会保障の文脈から考えてみれば、リーランの「身元」を保証してくれるはずの「形のあるもの」としての国民健康保険を手に入れることは、当然、帰化を意味するだろう。しかし、リーランは表面的にはあれほどまでに追い求めるかのようなふりをしながら手に入れた国民健康保険(＝日本名＝日本国籍)を、まるで此れ見よがしにいとも簡単に他人に売ってしまう。それは結局、日本国籍それ自体が自分のアイデンティティを保証してくれることはできないということであり、さまざまな社会保障の中でも国民健康保険を問題にしたのは、国際人権規約と難民条約に加盟するなど、表面的には日本人と同等な社会保障を認めるかのような構えを取りながら、運用上では在日コリアンを排除していく戦後日本の暴力的な在り方を逆説的に表現したとも言えるのである。そして、そういう意味において行方不明になった辻政信が作品の中で召還される理由も理解できる。つまり、最初はプラス評価として追い求められた辻政信をリーランが一方的に切り捨てる描写は、プラス評価が隠蔽する戦争責任問題を前景化させると同時に、行方不明にともない1968年7月20日付で死亡宣告された辻政信の期限切れの国民健康保険を焦点化することにより、国籍によって一方的に社会保障から切り捨てられる在日コリアンの立ち位置を反転させる形で提示したとも解釈出来るのである。

6. まとめ

唐十郎の『新・二都物語』が書かれ上演された1980年前後は、日本では国際人権規約と難民条約に加盟すると同時に在日コリアンをはじめ、日本に在留する外国人の処遇が少しずつ改善されていく時期である。しかし、在日コリアンの内部では「第三の道」論争が典型的なように、在日「二、三世」（二～四世は「八五%」）の割合が「八〇%」を占めることになり、その生き方をめぐって激しい議論が展開された時期でもあった。出入国管理局の役員である坂中英徳は在日の生き方を「（一）帰国志向、（二）帰化志向、（三）韓国・朝鮮籍のまま日本に定住志向」に分類していて、（三）のタイプは日本社会にマイナスであるから、日本政府は在日コリアンが帰化しやすい環境を作っていくことが重要であると提案している¹⁷⁾。これを受けて飯沼二郎は、（一）は祖国の不安定のために期待できず、（二）は同化主義につながるから駄目、世代交代を考えれば坂中英徳がマイナスと危惧した（三）のタイプこそ、正當に評価されるべき「第三の道」であると主張したのである。しかし、二人の対立は、朴一が指摘しているように「基本的に帰国思想を否定するもの」である故、「精神的に祖国と一体化した在日一世の批判を浴びる」ことになる¹⁸⁾。

こうした議論を視野に入れながら韓国にも日本にも帰属感を感じないと語る李礼仙の主体の在り方に注目してみると、李礼仙は（一）にも（二）にも属さない。そして、1975年に日本に帰化しているから、「韓国・朝鮮籍のまま日本に定住志向」という（三）にも属さないことが分かる。つまり、李礼仙は同時代の「第三の道」という論争においてはいかなる範疇にも属さない主体であり、（一）と（二）を跨ぎ、（二）と（三）を跨ぐ、文字とおり境界を生きていたと言える。

唐十郎はこういう主体を持つ李礼仙に向けて書いた『新・二都物語』の中で、帰化によるアイデンティティの変容を問うた。しかし、その中に描かれている帰化は単純な「帰化志向」ではなく、帰化することによりアイデンティティが変容されないことを逆説的に描くことによって、戦後日本の植民地時代の責任問題と国籍を基準に排除させていく在日コリアンをめぐるさまざまな社会保障のカラクリを切開きさせたのである。

17) 朴一「『在日論』論争の成果と課題—在日朝鮮人二・三世の生き方をめぐって」（『ほるもん文化』1992年10月、94頁）

18) 注17に同じ。

【参考文献】

- 朴一 『僕たちのヒーローはみんな在日だった』 (講談社、2011年5月、54頁)
- 扇田昭彦 『舞台を語る』 (集英社新書、2002年8月、140頁)
- 編集部 「李礼仙インタビュー」 (「別冊新評」1974年10月、81頁)
- みのもんだ・李礼仙 「おもしろい対談」 (「サンデー毎日」1991年2月3日、149頁)
- 李麗仙 『五つの名前』 (集英社、1999年3月、19～20頁)
- 李礼仙 「汚れ役に品性を加えてゆく」 (「クロワッサン」1979年10月、39頁)
- 唐十郎 「帰化」 (「現代詩手帖」1974年11月、62頁)
- 唐十郎 「役者の抬頭」 (『腰巻お仙』所収、新潮社、1969年7月、33～34頁)
- 扇田昭彦 「解題」 (『唐十郎全作品集 第一巻』所収、冬樹社、1980年7月、396頁)
- 拙稿 「物語る「肉体」—李礼仙論」 (『戦後在日コリアン表象の反・系譜—〈高度経済成長〉神話と保証なき主体—』所収、花書院、2011年3月、174頁)
- 吉田清久 「私が見た「辻政信」」 (「読売ウイークリー」2007年4月15日、38頁)
- 有馬哲夫 「CIA文書発掘失踪辻政信は雲南に抑留された」 (「文芸春秋」2010年10月、275頁)
- 杉浦明平 「逆立ちした国民文学」 (「朝日ジャーナル」1966年1月9日、36頁)
- 半藤一利・保阪正康 [他] 「昭和の陸軍 日本型組織の失敗」 (「文芸春秋」2007年6月、126頁)
- 西方望 「辻政信に於ける人間の研究」 (「人物往来」1953年1月、30頁)
- 田中宏 『在日コリアン権利宣言』 (岩波ブックレット、2002年4月、38頁)
- 朴一 「『在日論』論争の成果と課題—在日朝鮮人二・三世の生き方をめぐって」 (「ほるもん文化」1992年10月、94頁)

要 旨

唐十郎の『新・二都物語』が書かれ上演された1980年前後は、日本では国際人権規約と難民条約に加盟すると同時に在日コリアンをはじめ、日本に在留する外国人の処遇が少しずつ改善されていく時期である。しかし、それと同時に、在日コリアン内部では「第三の道」論争が典型的なように、1980年を前後にして在日2・3世が「八〇%」を占めることになり、その生き方をめぐって激しい議論が展開されていた時期でもあった。

李礼仙は1975年に日本に帰化している。しかし、帰化はしているものの自分は日本にもそして韓国にも違和感を感じており、帰属感を持たないと語る。そう考えれば、李礼仙は日韓に引き裂かれた主体であると同時に、同時代の「第三の道」論争の中でもどこにも属さない引き裂かれた主体だった。そして、こうした李礼仙のために書かれ上演されたのが『新・二都物語』である。

戯曲の中のリーラン（李礼仙）は自分の「身元」を保証してもらうために「日本名」（いわゆる帰化）を手に入れようとする。そして、その時、「身元」を保証してくれる日本人として召還されたのは他でもなく戦前は「作戦の神様」と呼ばれ、戦後はラオスで行方不明となった辻政信だった。しかし、戯曲はリーランが辻政信から日本名が記入されている「国民健康保険」を取上げた瞬間、急転回を見せる。つまり、それまでに戯曲の中で肯定的に描かれてきた辻政信を反転するかの如く、「身元」を保証してくれるはずの国民健康保険をいとも簡単に他人に売ってしまったのである。こうしたリーランの反転を同時代の在日コリアンをめぐるさまざまな社会保障の文脈から考えてみれば、国際人権規約と難民条約に加盟するなど、表面的には日本人と同等な社会保障を認めるかのような構えを取りながら、運用上では在日コリアンを排除していく戦後日本の暴力的な在り方を逆説的に表現したとも言えるのである。そして、帰化することによりアイデンティティが変容されないことを逆説的に描くことによって、戦後日本の植民地時代の責任問題と国籍を基準に排除させていく在日コリアンをめぐるさまざまな社会保障のカラクリを切開してみせたのである。

キーワード： 李礼仙、唐十郎、辻政信、在日コリアン、帰化、国民健康保険

투 고 : 2012. 5. 31
1차 심사 : 2012. 6. 16
2차 심사 : 2012. 7. 7